



★五輪イヤー、2008年は予想だにできなかった事態へと向かっている。4年ぶりの家電サイクルにフラットTV需要の波が加わると期待されていたエレクトロニクス市場は、昨年下半年より始まったサブプライム不況が暗い影を落とし、当社のDGレシオでも過去に例がないほど景況感に欠ける五輪イヤーとなっている。マクロ景気や株価など、景気指数となるバロメーターは総じて悪化しており、DGレシオの分析からも同じ傾向が読み取れる。当社では、世界の半導体市場の予測を更新したが、2008年は前年比4.0%と、五輪イヤーとしては過去に例をみない低成長に終わると結論づけた。そこで、今回は史上最悪となった五輪イヤーから、何が変化しているのか、また将来はどうなるのかについて分析を試みた。

★フラットTV需要や五輪景気で家電機器は全般的に好況になると予想された2007年だが、終わってみると数品目しかヒット商品が出ていない。ポジティブ・サプライズとなったのは、ゲーム機で4,900万台と、出荷は過去のピークに匹敵する台数になった。これは単に任天堂のWii効果である。テレビゲームでは、ポータブル機でも任天堂の製品が堅調で市場は4,400万台まで拡大した。

デジタルカメラ市場も好調に推移した。2007年のデジタルカメラ生産台数は、前年比+23%となり、1億台を突破した。2003年に市場に出始めた一眼レフタイプのDSCは、先進国を中心に高い人気を維持している。2007年の生産は、前年比+41.7%で746万台になった。2008年も成長は継続と予想。市場は1億台を突破しているが



業界の動き

史上最悪の五輪イヤーから学ぶもの

崩れた家電サイクルと半導体市場への影響

2008年も成長は継続すると予想している。LCD TV市場は2004年から強い勢いで伸びており、なかでもデジタル方式が本命である。2007年の生産は前年比+60%の約7,900万台であった。2008年は1億台を突破すると当社では予想している。

★2007年の第2四半期に業界が目を見張るできごとが起きた。無名だったVizioという新ブランドが米国市場で台頭し、トップシェアに躍り出たことである。これがVizioショックである。

Vizioのテレビが市場でシェアトップに躍り出た背景には、消費者の支持も無視できない。

こうしたユーザー動向をみると、早くも、フラットTVは買い手市場となったと感じる。これから、フラットTVには、ますます、厳しい価格競争とコスト・パフォーマンス要求に対応するためにより慎重な戦略が求められることになるだろう。そして、この結論はフラットTVに限った話ではなくなっていることも、認識しておかなければならない。フラットTVを



はじめとする家電産業は、成熟産業へと歩みを速めているのだ。

家電産業は、半導体市場の牽引役として大きな影響力を發揮してきた。しかし、携帯電話市場の拡大につれて徐々に半導体に与える影響は小さくなっている。2007年の産業別半導体消費割合は、コンピュータ関連が38%を占め、通信機器が25%、家電が21%であった。そして2010年には、昨今の台頭が著しい自動車機器の影響で家電機器のシェアが低下すると予想している。そうなると、家電が半導体産業に与える影響はさらに希薄になってしまう。

★だがポストフラットTVとして、新規需要を創出できるアプリケーションが登場すれば、回避の道も開かれよう。そして、新規需要創出のキーワードは、「ゲートウェイ」と「ストレージ」であると分析している。「ゲートウェイ」とは、ユビキタスネットワークに繋がり、ユーザーにより高度なサービスと付加価値を提供できる端末や技術のことである。具体的な例を挙げると、ネット型のゲーム機やインテリジェント型STBなどである。また、膨大な情報やデータを整理、格納する「ストレージ」も家電製品に強く求められるコアテクノロジーとなるだろう。こうした点で注目されるのは青色LDの普及である。Blu-ray用の再生専用OPUコスト分析を行った結果、急激なペースで価格は普及帯に入るとみている。後は、こうした機能を融合し、最適化した上で、タイミングよく市場に投入できるかという点が重要になると考えている。再び、家電産業の手腕が問われる時がやってくるだろう。

(アイサプライ・ジャパン

主席アナリスト 李 根秀)

